

# 生活の伝承 36

発行者 民家園のつどい  
 会長 近野厚子  
 発行所  
 福島市五老内町3番1号  
 福島市文化振興課内  
 「民家園のつどい」事務局  
 ☎024-535-1111(内線 5373)

## 鎮守の森の神様と地域のくらし

民家園のつどい

副会長 茂木 憲夫

神社はこの地域にも一座や二座は鎮座しており、私の住んでいる南沢又はには五社が祀られている。今回、私の住む近くに鎮座する加茂神社と境内の石碑(石塔)群を通して地域の生活について考えてみたい。

加茂神社は勧請年月が定かではないが、寛永年間(一六三〇年頃)に地域の開拓にあたり、当時は想像を絶する難事業であったために、神仏の力に頼った。北方に開拓・国造りの神、南方に火伏せの神を祀り、開拓と領民の安泰を願ったものと伝承されている。

祭礼は十月十九日(旧暦九月十九日)。現在は第四日曜日に地域住民による氏子によって行われている。

神社とは何だろうと考えてみると、①神道の神を祀る所、②感謝と祈りを捧げる場所(広辞苑より抜粋)と言われている。地域の神社とは生活の中から出てくる願い事をするところ、作物の豊作・豊穰、家内安全安泰。何よりも健康な身

体等、日頃のくらしが無事送られていることへの感謝と同時に心の安らぎを祈り捧げるところであろう。そして、地域に住む人々の伴を確かめ合い、交流の場との意味合いが強いものである。祭り、盆踊り、節々の参拝はその表れであろう。地域では今でも新年を迎える大々縄の製作も行われている。

○境内の石碑(石塔)群

境内には庚申塔、妙見祭碑、かまど神碑、湯殿山碑、足尾山碑、諸国神社拝礼の碑、馬頭観音碑のほか、石祠が建立されている。

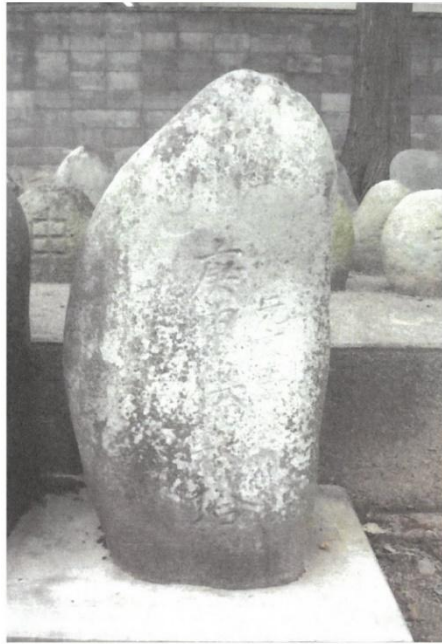
1. 庚申、庚申待、庚申講、庚申塔

十干と十二支を組み合わせた暦法の六十日毎に巡っていく庚申の夜に三戸(さんし)という虫が睡眠中に身体から抜け出して、天帝にその罪過を報告するから生命を奪われる(道教の説)という信仰がある。この信仰にもとづいて、庚申の夜は眠らず慎むというのが庚申待である。室町時代から民間に庚申講ができ、庚申さまを祈る風習が広まった。また、庚申講は庚申塔を建て供養も行った。

庚申講のある地域では庚申の夜に当番の家に集まり、庚申

像の掛軸を掛け、「オウコウシンメ、コウシンメ、マイタリマイタリ、ソワカ」と庚申の真言を唱え祈り、神酒を飲み交わした。また、小さな短冊に「庚申メ」と書いた紙を分け合い家に持ち帰り、雨戸などに張り安全を祈願した。境内には百体近い庚申塔が建立されている（百庚申）。

この地域での庚申待の夜の行いの詳細については調べることが困難になっているが、私の生家のある松川町水原では、記述の内容の事が行われ、当番にあたり「庚申メ」と書いた短冊を講中分用意したことを覚えている。



元文五申年  
庚申供養塔  
(上部に日と月が彫られている)

2. 妙見祭(塔)

妙見講は、相馬三妙見(相馬中村神社、相馬太田神社、相馬小高神社)の参拝講で馬の守護として祈った。

石塔には星(北斗七星)が彫られており、貴重なものである。



妙見祭  
弘化二巳年十一月廿二日  
上部に星(北斗七星か)が彫られている

3. 竈(かまど)神(碑)

かまどを守護する神。奥津日子命(オクツヒコノミコト)、奥津比売命(オクツヒメノミコト)を祀る。台所の神ともいわれ、主婦を中心にして祀ったものであろう。



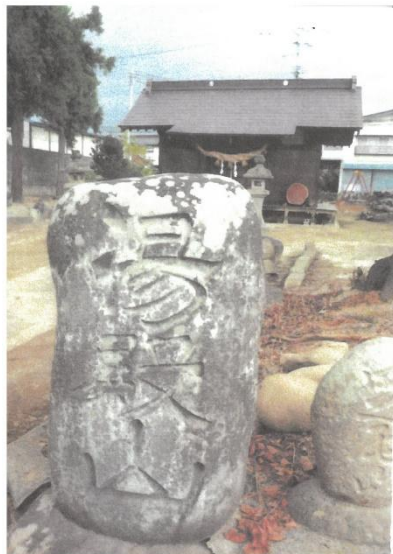
竈神  
天保十亥年

## 4. 足尾山(碑)

足尾講は茨城の筑波山と加波山の間にある足尾山を勧請して健脚、旅の安全を祈る講中。信夫山羽黒権現境内にある足尾山の大ワラジ奉納との関連があるのだろうか。

## 5. 湯殿山(碑)

出羽三山の一つで羽黒山、月山と共に山岳信仰として祈られ祀られている。石碑には「先達文殊院」とあることから、出羽三山講、湯殿山の宿坊に関わって建立されたものと思われる。湯殿山の石塔は神社境内の外にも見受けられ、近くでは伝正会館の路傍にもある。



湯殿山  
先達文殊院  
天保十二丑年七月十九日

## 6. 馬頭観音塔

馬の守護神。江戸時代の助郷制度により多数の馬が飼われていた。馬の守護神供養として馬頭観音が建立されたものと思われる。境内に

は数基の塔が見受けられるが、建立の時代は読み取れない。

その他、南米渡航者寄進の石灯籠(昭和八年九月十九日旧)も建立されている。

地域の小社である氏神様の境内では日頃のくらしから生まれてきた伴、相互扶助、娯楽と交流が形となって表れたものが碑や塔を建立し、心の拠り所とし、そして何よりも住民の伴を結び高める場所であった。

講は①仏、菩薩、祖師などの徳を讃嘆する組織、②神仏を守り又は参詣するために組織する団体、③一種の金融組合又は相互扶助組織(広辞苑より抜粋)とある。地域の講は神仏を守り、参詣する事と相互扶助のものであったろう。

この地域でも記述のほか、古峯講、念仏講、地藏講などが組織されていたが、時を経るにつれ消滅し、忘れ去られようとしている。詳細について不詳なのが残念である。

この稿は調査・検証が不十分で未熟なものであるが、御理解、御容赦と御指導を頂ければ幸いである。

皆さんも近隣の神社を訪れてみては如何でしょうか。新たな発見があるかもしれません。

## 昔話と私

### 民家園のつどい

幹事 高野 裕美子

令和五年十二月に自分たちの土地を大事にし、そこから語られる昔話を民家園を基本として伝承していきたいと有志が集い、令和六年四月に民家園のつどいの中に昔話ワーキンググループを発足させ、本格的に活動を開始しました。当初は昔話に興味があり、面白い企画ができてきそうとわくわくした気持ちでの出発でした。しかし、それからが大変。昔話の定義を考えれば考えるほど難しく、泥沼から這い上がれない状態が続きました。私自身大変な道に足を踏み入れてしまったと考えるの甘さに驚愕しました。ポプラ社の総合百科事典で「昔話」と引くと、「昔から人々の間で語られ、伝えられてきた話で、とくに「むかしむかし、あるところに」で始まるもの。昔話はもともと文字で表されたものではなく、人から人へと伝えられたもの」と書かれていました。また、昔話民話ではなく、「戦後、文学者が昔話に手を加えたものが民話と分類される」とあり、本当に土地に根付いた昔話なのか、創作が多く取り入れられた民話なのか、自分でもわからなくなりました。とにかく、自分が語りたい昔話、自分に合った語り口を見つけようと動き出し、ふくしま民話茶屋の会が発行している「ふくしまの民話」を参考に「鹿女房」を選びました。「鹿女房」は土湯温泉町地区のお話で、話の元になるシカの足跡石が土湯温泉から旧道に入った赤坂地区

にあります。夫婦の思いやりを感じられる内容で私の好みだったことと、優しい口調で語ることができるのではと思い選びました。実際にシカの足跡石を見ようと出かけると、シカの足跡石に立てられている説明文と、話の内容に大きな違いがあり戸惑いました。土湯温泉観光協会が立てた説明文には「建長二年七月、親鸞上人の高弟が夢のお告げにより前世の遺骨を探し求めて土湯温泉の近くにたどり着く。そこで、一人の猟師に会い道案内を頼むが、猟師は今日一日獲物が取れず、明日食べるものもないので道案内をしている暇はない、と引き受けない。高弟の上人は、お前が一日中獲物を求めても御仏のご加護がない限り獲物を獲ることができない。猟師の弓矢を取り、石の上に置けば、どこからともなく八匹の雌鹿が現れ、矢がひとり鹿を射止めた。これを猟師に渡すと恐れおののき、道案内をすることになった。大師堂下の松の根元より前世の遺骨が見つかり、その時をもって石にシカの足跡が残された」と書かれてありました。ふくしまの民話の本の中に書かれている話は「働きの猟師と気立ての優しい女房が仲良く暮らして、ある日獲物が取れなかった時、怪我をした大きな雌鹿を助け、女房が良いことをしたと褒めた話」、それから「病で女房が亡くなり、猟師も生きる力をなくしていた時に助けた雌鹿が女房の姿になり恩を返すお話」と思っていたのでショックを受けました。やはり祖母や父母より耳から伝えられた話を一つも持たない私が、これからどのように道を開いていけば良いのか、試練の始まりとなりました。そんな不安を抱える中、初めて人前で話す機会を与えてくれたのが、四月七日の「民家園春まつり」でした。第一回目はすべてが初めての

ことなので緊張しましたが、お話をしてみたい気持ちが勝ちました。旧寛家宿店が「昔話のおはなし会」の場所となり、時間は午前十時から午後三時まで。ワーキンググループからは六人が参加し、昔話の語り部の経験者が二名、他の四人は初心者でレパトリーが少なく、臨機応変の対応が難しかったです。語り部の時間配分が難しかったです。が、みんなの協力の元、無事終了しました。旧寛家宿店は風情があり、昔話の語り運びにぴったりだと思いました。

二回目は七月二十日の「夜の民家園」。午後三時から九時までのイベントでした。六時からライトアップがされ、ライトアップされた民家園の雰囲気は素敵でしたが、夜に昔話を聞きに来てくれるのか心配でした。しかし、蓋を開けてみると六時半からの「古民家で昔話」は盛況でした。八時過ぎまで途切れることなく観客が見守ってくれ、無事終了しました。反省点は時間帯により観客に通る声で話す必要があること、昔話を始めた後は聞いてくれる人に集中し、自分の話に徹すること、観客を引き付ける話を工夫することが挙げられました。また、手元が見えないくらい真っ暗になったので、ライトは必需品でした。昔話をしている人の周りに他のメンバーが座って待機していたので、聞き手により臨機応変に対応ができ、良かったとの声もあがりました。

そして、第三回目は十一月四日の「民家園ふれあいまつり」でした。午前十時から午後三時までのイベントでした。場所は三回ともすべて旧寛家宿店。季節を感じながらのお話会。旧寛家の中から観客を見ると池が見え、木々や花の移り変わりが目で感じられ、本当に素敵な場

所だと実感しました。しかし、十一月四日は連休で用事が重なる人が出たため、五名での対応となりました。五名体制なのでお話の時間を四十分に決め、お昼休みを除いて四回の時間帯で進めました。観客は三十人から四十人でした。食事をとりながら、昔話と、この頃作られた創作の話の違いについて勉強会をしました。私たち慣れないメンバーはストーリーを描いたマニュアルを持参して、時々それに目を落とすことがあります。昔話は人に話しかけることが大切なので、目線がマニュアルに注がれると空気が白けるため注意した方が良くアドバイスを受けました。また、昔話を聞きに来てくださる方たちにとっては新人であろうがなろうが関係ないので、自信を持って話すべきとも言われたことが心に残りました。

これからの目標は、昔話の幅を広げるため、昔話の伝承の元になった場所等に出向き、伝承し、昔の人の思いに触れたいと考えています。伝承していかないと消えてしまう昔話を一つ一つ大切に拾い上げ、自分で創作するのではなく、できるだけ正しく伝承していくことを目指して、これからも精進していきたいと思えます。



「夜の民家園」



「民家園ふれあいまつり」

## 「民家園のつどい」会員随時募集中

「民家園のつどい」では、一年を通して福島に伝わる「年中行事」の再現や「体験行事」を行っています。祖先の残した文化を今後も後世へ伝承していくため、ぜひ一緒に民家園の魅力を発信しませんか？興味のある方、会の活動内容をお聞きになりたい方など、お気軽に事務局までご連絡ください。

### 【令和六年度の主な活動内容】

- 5月
  - ・年中行事「端午の節句・田おこし」「田植え」
- 6月
  - ・年中行事「むけの朔日」、体験行事「子どもの遊び」
  - ・園外講座「養蚕関連施設の見学（飯坂町中野「工房おりをり」ほか）
  - ・「各民家旧所在地の視察（旧客自軒跡地ほか）」
- 7月
  - ・年中行事「たなばた」、体験行事「昔のくらし」
- 8月
  - ・年中行事「盆の行事」
- 9月
  - ・研修「わら細工（べこぞうりの作り方を学ぶ）」
  - ・年中行事「おつきみ」、体験行事「わら細工」
- 10月
  - ・視察研修「市外類似施設の視察（みやぎの明治村ほか）」（宮城県登米市）
  - ・年中行事「稲刈り、脱穀」「収穫祭」「子ども秋まつり」
- 11月
  - ・体験行事「わら細工」
- 12月
  - ・研修講話「年中行事のしくみと意味」講師：岩崎真幸氏（福島県民俗学会会長）
  - ・年中行事「正月迎え」
- 1月
  - ・研修「わら細工（正月迎え用注連縄）」
  - ・年中行事「小正月」
- 2月
  - ・研修「わら細工（小正月用注連縄）」
  - ・年中行事「節分」
- 3月
  - ・年中行事「桃の節句」

【事務局】福島市 文化振興課 文化財保護活用係

☎（〇二四）五二五の三七八五（直通）